

# 活動報告書

報告者氏名: 高野 嘉裕

所属: 大分県立日田支援学校

記録日: 2015年 2月 9日

## 【対象生徒の情報】

- ・学年 中学部3年生
- ・障がい名 知的障がい・ダウン症
- ・障がいと困難の内容
  - ・自発的な動きが少なく、行動に関してもゆっくりである。
  - ・有意な発語はなく、意思の表出も少ない。表出がある場合でもその把握のためには本人の生活や好みなどの把握が必要であり、誰にでも伝わるというものではない。
  - ・非常に慎重な性格で、人や場所に慣れるまでに時間がかかる。

## 【活動目的】

- ・当初のねらい  
活動や行動の理解によって、自発的な行動を引き出す。
- ・実施期間  
2014年4月22日～現在
- ・実施者  
高野 嘉裕
- ・実施者と対象生徒の関係  
担任

## 【活動内容と対象生徒の変化】

### ・対象生徒の事前の状況

事前情報として家庭でもタブレットを所有し、触れる機会があると聞いていたため、本人のタブレット操作の因果関係理解や興味・関心についての観察を行った。



PocketPond



Ripple HD



画面に触れることで反応があるという因果関係の理解はしていたが、操作などについては難しい様子であった。



カメラ



画面に触れることで反応があるという因果関係の理解はしていたが、操作などについては難しい様子であった。

この段階では、タブレットに限定という考え方ではなく、あくまで実態把握の一つとして上記のような取り組みを行った。対象生徒のタブレットの操作理解度や因果関係の理解度は、研究を進めるに当たっては重要なファクターの一つとなることに加え、この事前の取り組みから興味関心や実物と画像や動画などの関係性の理解なども考えることができた。そして、この取り組みから見えてきたことの一つとして、自分が映っている画像や動画に対して、非常に興味を示すという見えてきた。

## ・活動の具体的内容

簡単にわかりやすく、本人が興味を示したカメラで撮影した動画を用いた活動に取り組むことにした。毎朝の健康観察カードを保健室まで取りに行く係であったので、その活動に自分から取り組むことができるようになってもらいたいと考えた。



タブレットの効果（動画で提示） + 繰り返しによる定着（毎日の繰り返し）



係の仕事としてはできるようになった・・・

彼の困りの解消になったのか？ ←再考察→ 誰の困りの解消になったのか？

## ・対象生徒の事後の変化

対象生徒は確かに「カードを持ってくる」という活動に自発的に取り組むことができるようになった。ただ、自分の中では「タブレットの効果！」ということに確信が持てなかった。対象の生徒にとってタブレットの動画は行動のヒントとなったであろうし、毎日の繰り返しの取り組みが行動の定着に大切であったと思われる。だが、改めて考え直してみると、そもそも自発的な行動とは本人の意欲に基づくことが多いと思う。今回は本人の興味や関心に基づいた活動というよりも、教師の「そうあってほしい」という思いが強かったと考える。「本人の困り」ではなく、いつしか「このような行動をしてくれない」という「教師の困り」を解消する活動になっていたと反省した。

また、なかなか本人の表出や発信をつかめずに悩んでいた部分があったのだが、魔法のプロジェクトでつながっている各地の先生方に相談したところ、対象生徒について共に考え、アドバイスをしてくださった。このことから、再度自分の実態把握の方法や観点を見直すことができた。

### 繋がりのある先生方からのアドバイス

自分の気に入ってる女子の写真を見つけて触っている様子から・・・

この生徒さんは、自分のお気に入りの人に触っているんでしょ？  
これって一つの指さし行動じゃない？



一人で写っている写真が3枚。その中から選んでいるということは、3択の選択ができるのでは？

写真を見て、お気に入りの女の子とわかっているのなら、実物と画像との関係を理解しているって思えるけど・・・

魔法のプロジェクトは子どもたちにとって多くの学びを提供してくれるが、研究者である教員にとってもたくさんのアドバイスやヒントをもらえる学びの場であると感じることができた。

## 【報告者の気づきとエビデンス】

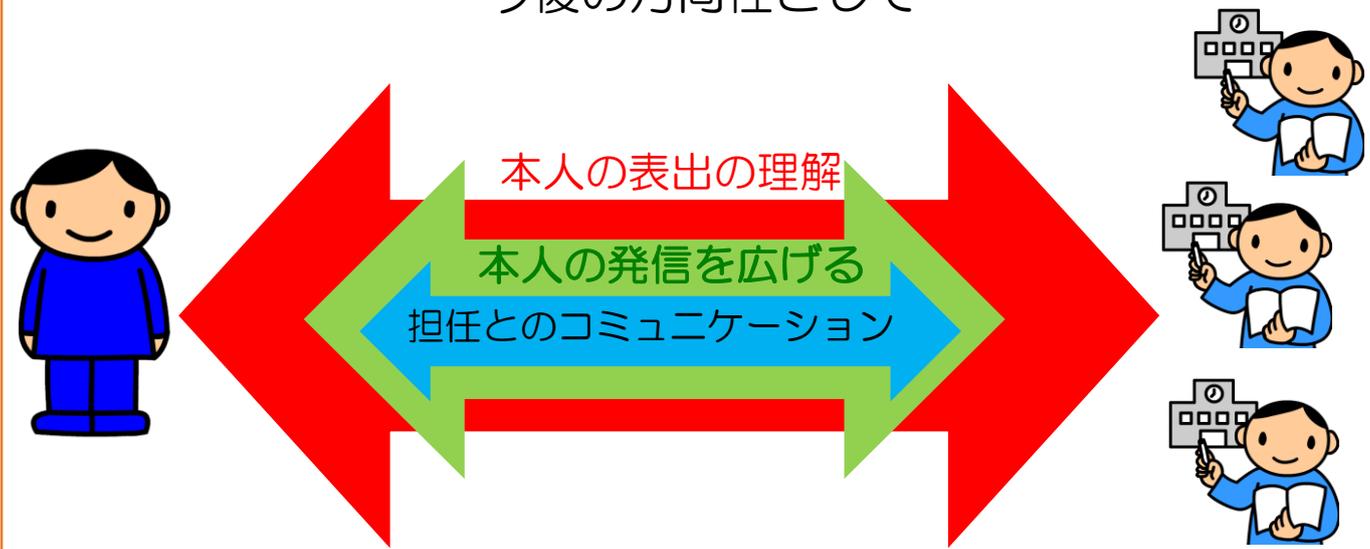
### ・主観的気づき

- ・対象生徒の実態としては画面や音楽に興味は示すものの、まだタブレットの活用段階にない。
- ・表出や意思表示などがあり、それらをくみ取り気づいていくようにすることで本人の表出や行動の意欲も高めることができると思われる。

### ・エビデンス(具体的数値など)

- ・タブレットの操作に関しては、タップなどの動きはみられるが、それは音や画面の変化などのタブレットの反応を求めているものであり、本人が操作を意図して行っているものではないと思われる。
- ・信頼関係の構築により、手を引いて行きたい・行きたくない場所を伝える姿が増えた。また、独特の(両手を合わせる)サインをもち、使い方もある程度理解している。まずは担任とのコミュニケーションの成功体験を増やす。

## 今後の方向性として



### ・その他エピソード(画像などを含めて)

#### ○エピソード 指さし行動の増加

学習の中で本人が好んでいる本の表示を指さして言葉を要求する姿が見られていた。最初は本の中に表示されている画像に限られていたが、その学習を写真カードなどに広げていくことで、校内の掲示物を指さして言葉を要求する姿が見られるようになってきた。実態の把握を行い、基本的な力を高める学習の必要性を強く感じたことから、マッチングや選択の学習を丁寧に繰り返しながら、その学習教材も



一つに限らず他の形態の教材などを取り入れたことによって、対象生徒の中の興味の広がりがみられるようになってきたと考えられる。この広がりをさらに高めることによって、独特のサインや行動からの読み取りといった限られた関係の中でのコミュニケーションの成立が、カードやタブレットに広がることとなることで、コミュニケーション方法の拡充となる。このことで、これまでの限られた支援者との生活も、より多くの支援者へと広がってくると考えている。